
神話の創り方

雪銀世界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神話の創り方

【Nコード】

N7766X

【作者名】

雪銀世界

【あらすじ】

高校生が事件に巻き込まれます。内容は考えていません。いきあたりばったりのご都合主義展開です。実験的に作っていきますので、誤字脱字の指摘は大歓迎です。辻褄合うように頑張ります。

プロローグ

「おぬし、まだ見つけれないのか？」

偉そうに少女が聞いてくる。昔から良く言えば豪胆。悪く言えば乱暴者である。

その性格は直らないものか？

「そう焦らないでくださいよ。そうだ、ケーキとコーヒーがありますよ。食べませんか」

乱暴者の前にコーヒーをマブカップに注ぎ、ケーキを持ってくる。

(これで、少しは大人しくなるだろうか？)

少年は素直に期待するが。

「そんな、甘ったるい食べ物は何も食べん」

少女はそっぽを向き、少年の期待を裏切る。

しかし、その言葉に反比例して少女の口から涎がでていた。

威厳にこだわっているんだろうか。昔から威厳なんてなくせに。しかし、そんなことを言うとは鉄拳がとんでくる。まったく、乱暴者は困る。

内心、少年は少女に対して悪態を尽いた。

「なんだ、その目は」

昔からそうゆう所だけは目ざとい。

(まったく、はあ〜)

またもや、少年は内心に溜息をつく。少年はこの歳では珍しく素

直にきつぱりと諦めて従う。

「では、コーヒーでも飲んでいてくださいよ。いい豆で作ったんですよ。その間に探しますから」

「うむ」

よし、大人しくなった。探すか五月蠅くなる前に。

少年が探す体制に入ったときに、「ちやぼん、ちやぼん」と効果音が少年の後ろから聞こえてくる。

「何をやっているんですか？」

信じられないという目つきで少女の方を見ると。

「見た通りコーヒーを飲もうとしているではないか」

すばやく少年は聞き返す言葉に、少女は平然とすまし顔で答える。

「その、コーヒーに角砂糖を何個入れたんですか？」

「8個だが。何か変か？」

少女は平然に聞き返してくる。

(イヤイヤ、甘ったるいのが嫌いな癖に、砂糖8個も入れるのは変じゃないか?)

少年は心の内で突っ込みを入れて目を細めた。その瞬間「とりゃあ」と掛け声と共に少年の体が逆さまに飛んでいた。

「うぎゃ〜」

惨めな声と共に本棚にぶつかつた。その拍子に本が崩れ、倒れた少年の頭に本が落ちてきた。

「うあ〜イティイティてってっ……」

投げられたのか？と思い。頭を抱え込みながら少年は床に蹲る。

(なぜ、こんな目に)

そう、考えてくると少年は徐々に腹が立ってきた。

「何をするんですか！！ 急に！！」

少年の厳しい顔つきで理不尽な暴力を立ち上がり抗議しようとするが、少年の愛らしい顔つきの為か怒っている風には見えない。

「いや、おぬしが拙者の事を侮辱しているみたいだな。今度は完璧に顔に出ていたぞ」

しまった。態度に出ていか。と少年は反省する。

昔からこの男は……。いや、今は少女か。と思い直す。

「ふむ、早く見つける」

しまいには謝りもしないでと、ぶつぶつ文句を呟きながら立ち上がる。

その瞬間、探し物が少年の目に入った。

「あ、見つけた」

ポロツと少年の口から漏れてしまった。

「本当か！！」

身を乗り出し少女は聞いてくる。

「本当ですよ。あなたの探し人とあれば、まさかたぶん……」

少年はまさかと思いつながら、その忌まわしい名前を呼ぶ。

その忌まわしい名を聞いたとたんに、乱暴者は右手を腰にやり左手に細長い柄が特徴な金槌を天井に上げ、片足を少年の部屋のテーブルに乗っけながら物騒な事を言葉に出す。

「拙者の『正義』で奴を殺す」
やれやれ、本当に正義なんですかねえ？少年は思う。先の反省が口や態度にはけて出すことは無かった。

その前に、少女の足の振動のせいか折角のコーヒーをこぼしている。

（汚れがじゅうたんに付いたら掃除大変なんですよ。まったく誰が掃除すると思っっているんですか）

もう、何度目かの悪態をついた。もはや、何も思うまいと少年は心に誓った。

「これから、どうする気ですか？」
少年は慎重に聞き返す。下手なことを聞いて、こんな狭い部屋で暴れられたら困る。

「簡単な事。転校するのさ」
少女は軽口をたたきながら、ポーズを解く。

「両親にはどう言いくるめるのさ？」

「拙者の家は武人の家、訳を話せば転校など簡単な事だ」

確かに少女の家は武道の名門だ。その中で、あなたの力は抜き出ている。
どうやら、力で脅すようだ。まあ、厄介払いができて嬉しいだろう。

あの乱暴者に話してよかったんだろか。すごく不安だ。

しかし、僕は時が来るまで傍観者である。

プロローグ（後書き）

初めて書く小説です。

言葉が難しいです。本当に難しい……。。

ヒゲは主人公ではないよ!!

「おゝす、おはよう」

教室で挨拶と同時に隼の肩を叩く、その人物は、なぜか高校生らしくない無精髭をはやしていた。

「おはよう。て、髭剃ってこいよ。それじゃ、サンタクロースの叔父さんだ」

今はまだ、短く生やしているが、時が経てば自分の髪より長くなる事は目に見えている。

あだ名が見た通りのヒゲである。これでも、生徒会の書記、趣味は18禁がつくものなら、誰の横にも並ばない。なぜかこの学校の裏の権力者であるらしい？

「知っているか。今日、転入生が来るらしいぞ」

「それは、めずらしい」

めがねのふちを手で「くい」と上げる。我がクラスの学級委員の金山さんが話しに入ってくる。ちなみに制服ではなく巫女服の服を着ていた。

「北海道の離れの小島、しかも、5年前に島の山が活性化、島全体にガスが充満、避難勧告が解除されたのは2年前でつい最近です。ちなみ今の島の人口はガス発生前の人口の半分です。この辺鄙な疎開の地に、転校生はとてもめずらしい」

いつも、解説ありがとう。なぜ、いつも説明をするのんだろうか。不思議である。

確かにガス事件以来こんな辺境で危険な地に来るなんて、しかもこの学校は小・中・高等学校と一緒に校舎で、総生徒数200名ぐらいしかない。各学年一クラスしかなく、このクラスも20名しかないのだ。

「このクラスにその転校生が来るらしいぞ。話しによると、清楚な黒髪で座敷童子みたい女の子らしい」

ヒゲの声が大きいようだ。特に男子が騒ぎ出す。え、「まじか?」「そうなのか?」とざわざわと聞こえてくる。

女子生徒は「そうなんだ、仲良くしたいね」とか、「これ以上変な人を増えないように願うよ」と噂話をしている。変態だらけの有名なクラスで、まだまともな意見が言える人がいる事に隼は感心した。

ヒゲの方に隼は顔を向けるとにんまりと笑みを見せる。知らない人が見れば警察に通報しそうな犯罪者並みの笑みである。

「女の子だぜ、どうせなら身長は低いほうがいいな。胸もAカップ」
ヒゲの通称は 愛好家でもある。本人曰く、生まれたその日から墓場まで美人なら対象らしい。クラス一同では「将来はなんだか、有名になりそうだ悪い意味で」が暗黙の見解である。

「で、なんでその事を知っているんだよ。転校生が来るという事を」
ヒゲは自分の無精髭を上下にさすりながら、

「俺がこの学校の事で分からないことはないだろう。ちょっと、職員室にいったな」

隼はヒゲの話が終わる前にハイハイといいながら、腕をすくめた。

どうせ教師の弱みでも握って聞き出したんだろう。

（なんで、こんな奴が生徒会の書記なんだか。誰がした。誰が）
深いため息を隼はついた。

「まあ、俺の人望がありすぎるのがいけないだよな」

去年の5月、暖かい日差しが差し込むようになった時期である。

書記に当選した事を今のように自慢げに話していた事を隼は思い出す。あの日、自慢げに話している時のヒゲの誇らしそうな顔は不気味であった。あの時のヒゲの顔は、今でも表現がしづらい。

そう言えば、なぜ金山さんが巫女服のコスプレをしているかと疑問を持っている人が多いだろう。この教室だけではない、このコスプレは学校中に見られる光景である。

我が学校の伝説になる話である。今でも忘れない2ヶ月前の生徒総会の時だ。

書記なのに教壇の前に立ち、ヒゲはこう演説をした。

「古き風習はいらない、ここに新しい委員会を発表する。メイド委員（美化委員）、巫女委員（学級委員）、体操委員（体育委員）、看護委員（保険委員）を新たに作るうと思つ」

演説を熱狂的に怪しい宗教の教主の演説みたく話す。

その演説を一端くぎると、その間は凄く静かだった。

入学式、卒業式、いや、あんな暇で長つたらしい校長の話のときでさえあんなに静かになったことはない。他人の唾を飲む音さえ聞こえてきそつだ。

「委員は業務を行うさい制服を着用する。なぜなら、社会には制服という枠で役割がより分かりやすくなっている。それは、とても効率の良いことである。君たちは警察を見てその前で悪事を働こうとはしないだろう。それなら、学校でもそうではないだろうか」

さつきまで、頭が真っ白だったかようやく隼は理解した。そして、他の人も理解したのか、静かだった体育館が、今では床が底抜けするぐらいに騒がしいものになった。

「はあ、何を言っているの?」「つつか、ばかじゃないの」

女子が否定的な意見が述べている。常識的に考えてそうだ。

その状態を見て、ヒゲは指をパツチンと鳴らす。教壇の後ろの布を掛けているのを副会長が取る。

なぜ、副会長が裏方の役をしているんだろうか。こうゆう案を出させてくれると言う事は、もはやヒゲは生徒会を牛耳てるよな。と隼は考えていた。

「これを見てくれ。こちらは、生徒会で案を出し家庭科部に作ってもらった服だ」

指を後ろに指す。男共は「うお〜」という掛け声を一齐に発する。

やはり、この学校は変態ばかりだ。

「ちなみに、このメイド服はこのふりふり〜〜という事だ」

などと服の自慢をする。この先は長い話になるので省略をさせてもらおう。

決案を出そうとする。この案が通るかどうかは生徒の過半数以上を取ればいい。

(はっきり言おう、こんな案が通るわけが無い)

だが、隼は切望を胸にしていた。一応、男だし。

「では、賛成の人はその場で手を挙げてください」

この学校ならではのやり方である。普通は紙に書いて賛成か否定

大声で叫んだ。しかし、いつの間にこんなに協調しあっているんだ。隼は疑問に思った。

この1年間でヒゲが怪しげの集団を作っていたことを知らなかった。(本当は知っていたが見てみぬ振りをしたかった……。)

後で聞くことになるが、その集団のリーダーはヒゲで、その目的は学校に「萌」を作ること。この案も色々と根回しをしていたそうだ。何も知らないたいけな小学生も使ってた。

「ちなみに、頑胞というのは元は中国語らしいです。共同して励めとも意味だと言われています。それが、アメリカの軍隊に伝わりガンホーという言葉に変わったそうよ」「

金山さんがいつものように解説する。

「いつの間に隣にいるんだ。もっと前のほうにいたはずなのに?」

「私のスキルです。がんばりましょう」

金山さんは静かににっこり笑う。

(返答の意味が分からないぞ、しかも、ヒゲの賛成派なのかよ)のちにこの事件は小学生以外の女子に非難を受ける。

先生に抗議しようが「決まったことだから……」「まあ、生徒の自主性に任せる」と言い訳をして去っていく。

どうやら、先生の後ろに暗躍をしている人がいるそうだ。まあ一人しかないない。

そして、ヒゲは男子達には英雄として、女子達には最大の敵として認識された。

そう回想を思い返して、隼は教室を見回すと、金髪の「美」がつ

くほどの美少女外国人のメイド服は似合って目の保養になるが、丸刈り野球部のナース服はとてでもないが凝視は出来ない。

「さてと、みわちゃんが来るまでに座らないと。転校生か、楽しみだな」

学校の朝礼の始まりを知らせる鐘の音が島中に鳴り響いた。

ヒゲは主人公ではないよ!! (後書き)

ヒゲのキャラが目立ってるよゝゝゝ。

転校生が来ることで話が進むのはよくあることだよね!!

はりせんを机に叩き今日も元気な声が響き渡る。

「おはよう。なんと今日は転校生が来るでえ〜。男共は喜べ。結構かあわあええよ」

特徴的な大阪弁を話す大阪出身でもない北海道人。23歳という若さで担当のクラスを受け持つ。しかも、副生活指導の先生である。まあ、この学校は先生の数も足りていないと言う事だ。しかも、その若さで一児の母である。

「イジメはないように。や、入ってええよ」

先生の言葉とともにドアが開く。

身長は145cmぐらい、髪は日本人特有の黒髪で短い。背は低いくせに胸はある。予測としてDカップぐらい。手には剣道をしているのか、竹刀袋を持っている。容姿は胸がある座敷童子みたいだ。ヒゲの方に目をやると、値踏みをしているような眼つきをしていた。男共が歓喜の口笛を吹く。しかし、人数が少ないせい、口笛の音もすこし虚しかった。

(口笛、吹かなきゃ良かったよ・・・)

隼は顔を真っ赤にし、少し恥じた。

座敷童子に似ている少女が教卓の前に立ち教室を見回す。顔はだんだん険しいものになってくる。

「なんだ、この仮装は。何だか知らないが、拙者が来た限りこの風紀は取り締まる。ちなみに拙者の名前は近衛刀だ。好きな言葉は正

義だ。以上」

威風堂々と言う言葉が似合うだろうか。コスプレ衣装を見たら、目を真ん丸くするのが普通であろう。

知らないとはいえ、ヒゲに逆らう言葉を発言するとは・・・。

ヒゲの方を見ると、どうやら近衛刀を獲物と判断したらしい。

どうやらクラス全体の皆が認識したらしい。変人の分類だと言う事を。

「正義」という言葉を発するのは、たいていは怪しいにおいがする。

「よし、近衛刀に質問タイムや」

先生は、はりせんを手で回しながら「ほらほら」と周りにはやし立てる。そのお蔭で数人が拳手し質問をしてきた。

「前はどこに住んでいたんですか？」

「日本」

無愛想に面倒くさそうに単語一文字で答えを返す。

普通は前に住んでいる地名を言うのが常識だろう。しかし、大まかに『日本』と返すあたり、転校生のやる気のなさがうかがえる。

それでも、クラスメイトはめげないで質問を投げかける。

「彼氏いますか？」

「伴侶はいる」

その質問に何名か机に伏せる。近衛さんはなぜかクラスの金髪美少女を真剣に見ていた。

「和服に興味はないか？」

「拙者を愚弄するきか。さっきの話を聞いていないのか！」

このクラスで一人しか発さないであろう単語が飛び出す。もはや

分かりきったことである。

「この学校は分かりやすく服によって役職が分かりやすくなっているんだ。ちなみに、風紀委員は和服を着ることになっている」

(初耳だぞ? つゝか、転校生の姿を見て今決めたな)

分かりたくはないが、長い付き合いのおかげかヒゲの考え方が隼には手の取るようにその後の流れも分かった。

やはり、ヒゲの演説が始まった。そう、生徒総会に演説をした話だ。その話を聞いて男供はやはり雄叫びを上げる。

はつきり言って俺はついていけない。どうにでもなれと感じた。

(本当は心の中では期待をしている)

「拙者は知らん。そんなものは。風紀を乱しているのは、その生徒会自体なのか」

近衛さんはどこかで見たことがある様なニヒールの笑みを浮かべる。この笑みはよくは知っていた。獲物を見つけたときに顔を浮かべる顔だ。

よく見たことか……。他人がどうなるうが自分の目的が果たせればいいという笑みだ。

そう身近によくいるヒゲのその笑みとそっくりだった。それを見た後、いつも校舎では何らかの事件が発生した。

ヒゲと近衛さんの目線の先で火花が散った。どうやら互いに敵だと認識したようだ。

その後も、近衛さんに沢山の質問がされていくが、しかし、その返答も質素だった。分かった事は将来を誓い合った彼氏がいる事と、好きな食べ物がトマトと言うことだ。

質問時間が終了し、近衛さんは運が悪くヒゲの前の席に座るよう
に指示されたようだ。

「シブの隣の席に座りたい」

きつぱりと、はっきりと近衛さんは言った。

それほどまでにヒゲの前の席が嫌なのか。それとも先に見ていた金
髪少女を気に入ったのかどちらかだろう。

そりゃあそうだ初対面であれで、誰があこのヒゲの後ろの席に座り
たいだろうか。

誰だって女だったら天地がひっくり返ろうがそんなのは嫌だろう。
なにをされるか分かったもんじゃない。

金髪少女の名前を知っていた。知り合いだろうし、そこに座りた
いだろう。

（うーん！！）と呻りながら、先生は悩んでいた。ヒゲとのやり
とりを見ていた為にしようがないと思ひ承諾していた。

シブの隣の席の男子は「ちくしょう」と言い残しヒゲの後ろの席
に移っていた。

分かるぞ、その気持ち。シブは美人だ。金髪の髪が神々しいほど
に美しい。ちなみに去年の島の美人コンテストの優勝者である。

何人かの男子は近衛さんを見ていた。まあ、男なら仕方がない。
なぜか隼には興味もてなかった。逆に近衛さんを見ると寒気がす
る。本能的に近寄ってはいけないと体が警告していた。

（しかし、可愛そうにこの学校生活もシブの様にコブスレを着させ
されるだろう）とクラス一同共通な認識、話題になった。どうやら

ヒゲは気に入った様だ。

独り言で「胸がAカップだったら」と言っていたのは気にしないで
おこつ。

転校生が来ることで話が進むのはよくあることだよね!!!(後書き)

大阪弁が分からないよ。同じ日本語なのに難しいよね。
句読点がどんどん分からなくなっていく。。。。

ライトノベルでは親と別で暮らしているのは常識だよな？

昼休みまで近衛さんは寝ていた。

我が学校では生徒の自主性を重んじ、うるさくしなかつたら授業中は何をしてもいいという校風なのだ。

途中に起こそうとした人がいたが、手を置こうとした瞬間竹刀袋で叩き落すという芸当を見せた。昔の武芸の名人みたいだった。

その近衛さんを昼休みで起こした人物がいる我がクラスのメイドさんシブである。クラスメイトで始めて接触をした人物であった。

近衛さんは他の人には無愛想な顔を見せたが、シブには無愛想ではなく色々な表情を見せた。

例えば、今のように頬を赤く染めながら昼ごはんを一緒に食べたり、寝ていてもシブに話しかけた男がいたら、いきなり起きてきて変な虫がつかないように威嚇をしていた。

その様子も、放課後まで続いた。

「今日、家に遊びに行ってもいい？」

「まだ、荷物が片付いていない。今度、遊びにきてくれ」

「なら、私の家に来る？」

仲のいい親友見たく、近衛さんとシブは家に遊びに行く約束をしていた。

なぜ、そこまで仲が良いのか2人の話は聞いていたいが、

「お前の妹の銘ちゃんが来てるぞ」

クラスメイトに声をかけられたので、仕方がなくドアに近づく

「おい、どうした」

不機嫌そうに声を出したが、年頃の男性ではしょうがない事であった。肉親がクラスに尋ねてくるのは恥ずかしいものだ。

仕方が無く、身長は隼より少し低く誰に似たのかしらないが雪み
たいな綺麗な白い肌もつ妹の方に顔を向ける。

「今日三者面談だから、私の教室に来て欲しいのですけれども」

そう言えばそうだった。今、家には親がない。ガス事件の時に親の勤めていた会社が無くなった為に出稼ぎにいつている。そのためこの島での妹との2人暮らしである。長く家を空けるのが心配なのか隼だけが、こちらに住むはずだったのに我儘を言ったことがない銘が

「兄さんが行くなら私もいきます」

親に銘はきっぱりと宣言した。それに父親と隼は断固抗議をした。

父親は銘に溺愛をしており、小学生である銘が親元から離れるのは反対、隼は一人暮らしをしたい年頃であるためにもちろん反対した。2人係りで説得をしたが、銘は首を縦には絶対に振らなかった。

それどころか、母親を味方につけ、父親を説得し、隼に銘を連れて行かないと生活費は自分で稼ぐだねと、母親に脅迫されるまでにいった。隼の一人暮らしの夢は断念するしかなかったようだ。

現在、生活費は銘が握っている。

それでも一応、銘の保護者は隼という事になっっているが、精神年齢では銘の方が上で、家の中では立場が逆転していた。

ついでに言うと犬神家では名所正しい神社に住んでいる。爺さんの代まで神主をしていたが、爺さんが死んでからは神主不在である。親が言うには、神主だけでは生活をやっていけないらしい。

「ああ、そうだった。今行くよ」

声を掛けたが銘の反応はなく、今日来た転校生を見ていた。

「あの人、今日新しく入ってきた転校生ですよね」

転校生と知っている言い方である。この島では人口が少ない。そのため皆が、顔見知りなのだ。一日も経てば、すぐに噂が島中に広まる程である。

「そうだよ。クラスに入ってきた転校生。しかも、髭の生贄候補だね」

同情しながら銘に話すと

「え、そうなんですか」

他人には無表情に見えるが、隼には沈んだ顔をしていると分かった。なんで沈んだ顔をしているのか疑問に思ったが、まあ、相手の

同情だと隼は思い直した。

「気をつけたほうがいいですよ」

「何に？」

ふと、銘がこちらに向ける。

「あの転校生に・・・」

銘の顔はいつもの無氷な表情だが、なぜか怒っている気配を感じた。なぜ、怒っているのか姪に質問する前に。

「三者面が始まります」

隼の背中をやさしく軽くなでると、銘は自分の教室に歩き出した。隼は近衛さんの顔を一瞥して、銘の後を追いかけた。

今日は転校生が来た事以外はいつも通りの日常だった。いつも通り学校に行き、ヒゲと話し、学校が終わると部活をして、家では銘が作った食事を一緒に食べ、疲れを癒すために風呂に入り、そして寝る。それが毎日の繰り返しだった。

しかし、その日常も自分の人生も終わるとは思いもしなかった。

ライトノベルでは親と別で暮らしているのは常識だよな？（後書き）

ライトノベルでは親とあまり暮らしていないことが多いよね。家族をテーマにしているライトノベルは別だけどね！！

親衛隊（笑）！！

「号外〜〜。号外〜〜」

次の日、登校すると、我が学校に誇る新聞部の大声が聞こえてきた。

しかし、今時「号外」という言葉を聞くのはすごい古臭く感じるが……。

新聞部の人達が新聞を配っているのを手に取ると、見出しに大きな字で書いてあり、見出しを読もうとすると後ろから声が聞こえてくる。

「副会長、工藤章君、書記、新藤久信君が怪我して本土の病院にいったんだよ」

美しい声をしたほうを向くと

「おはよう」

ヒゲの生贄のシブが元気に声を掛けてくる。隼も「おはよう」と声を掛けた。シブは新聞紙の見出しに指を刺し、

「私ね、その新聞の見出しにある記事の現場に居たんだよ」

自慢するようにシブは言ってきた。ヒゲがいる前では内気な性格

だと思っていたが、意外と明るい性格のようだ。いつも、ヒゲが側にいたために、2人だけで話すのは始めてかもしれない。

それに、いつも思うが、金髪の外人が日本語を上手に話すのがとても違和感がある。

そのためか、少し緊張する。

「そうなんだ。どうして、あいつが病院送りに？」

ヒゲには興味がないが、話の流れで聞いてみた。

「簡単に言うとね。昨日の転校生、刀が来たでしよう？その・・・、手を出そうとしたらしたのよ。私みたいだね。そしたら、刀がすごく怒って、教室の窓から落としたんだよ」

ヒゲの事件は本当にどうでもいいが、転校生の事を昨日の今日で名前を呼び捨てにして呼んでいるのに気が付いた。

仲の良い女子でも「さん」「ちゃん」付けて呼ぶシブには珍しいことだ。

(窓から落とすとは、またや、変な特徴がある人がクラスメイトの一員になったのか)

そうゆう認識で済むような隼も変人の仲間だとは自分では気が付いてなかった。

「で、大丈夫なのか」

「1週間で病院から出てこられるみたいだから平気じゃないかな。」

その間、私はメイド服着なくても済むんだよ」

とても嬉しそうに言う。

隼は内心に「しまった」と思った。

美しい少女のコプスレが見れないという事は非常に残念だ。

「そう言えば。副会長はなぜ、病院送りに」

「あの人は、ほら校内で有名な女好きだから。手を出そうとして新藤君と同じ状態に・・・」

玄関に着きシブは上靴に履き変えながら気まずそうに言った。

副会長は、校内でも有名な女好きで、狙った女はスツポンの様に追いかける。

シブも狙われた時があった。その時の記憶が嫌なのか、その人の名前は言おうとはしなかった。

そのスツポンの工藤をどう諦めさせたのか？

それは、誰も逆らうことは出来ないヒゲが登場し撃退した。

シブは美化委員にも入っているし、その事件の解決のお礼のためなのか、メイド服を着るようになった。

「あ、なるほどね。で、その窓から落とした人物は自宅謹慎かい」

シブに聞いたとき隼の背後に殺意を感じた。

後ろを見ると昨日の転校生、近衛さんが立っていた。

昨日のように竹刀袋を持っていて、隼の顔を睨み付けながら、シブの手を引いて先に行く。

「今日学校に来ているということは平気なんだな」

隼は自分の上靴を手に取りながら、静かに小さな声で呟いた。

後でクラスメイトに聞くと、病院送りにされた二人組みは問題児という認識をされていたみたいで（まあ、当たり前か）、近衛さんが被害者（転校初日でもあるから）という立場らしいと説明された。

（しかし、近衛さんは本当にシブの事が好きなんだな。百合か？百合なのか？マリ てなのか）

心の底で、隼は淡い期待をしていた。

教室に着くと、近衛さんは昨日と同じように寝ていた。

シブはクラスの女子と話している。

男共はやはり少しへこんでいて、シブのコスプレを見られないのは精神的なダメージがあるらしい。その男共とシブのコスプレを見られない残念会を開き、不本意だがヒゲが早く復帰しないかとバカ話をしていた。

今朝の新聞の情報によって、裏の支配者を病院送りにしたとして、校内では近衛さんの噂が有名になっていた。

女子生徒には英雄として語られ、男子生徒には、裏のオークションで近衛さんの写真が出品されるほどまでになっていた。

我がクラスではシブと並び2大美人の誕生である。

そんな騒ぎに拍車を掛ける事件が発生、いつもの授業では寝ていた近衛さんも体育にはしっかりと参加し、1000m走を10・04秒の記録を叩出したときには驚愕した。

のちのち陸上部の女子に聞くと、女子世界記録を超しているそう

だ。

そのため、体育の先生や生徒達の部活勧誘大合戦が始まった。しかし、それを近衛さんは睨みつけ威嚇し撃退、それでももしくは勧誘をしていた部員は昼休みに3名ほど行方不明なったため、それ以降は勧誘する人は誰もいなくなった。

その噂に拍車をかけ、畏怖と尊敬の眼差しが集まった。

1週間後には親衛隊が出来るほどまでの大きな組織になるのは別の話である。

ようやく事件の始まりです。

授業を受け放課後を向かえ、部活動（茶道部）も終わり山が真っ赤に染まる頃、後ろに誰か付けている？と気づいた時には山道の人通りが少ない道だった。

隼は走っても止まっても、ピッタリと付いてくる事を確認した。

（なんだ、ストーカーか？もしかして、副会長か？

しかし、あいつは本土の病院だし男だからな。だけど、両刀使いとも噂されているし、こんな辺境な島ではみんな顔見知りで、人をつける行為をするのは副会長以外いないからな）

隼は馬鹿な考えで思考が埋まる。

その思考が正しければ隼の尻の が危ないと言う事だ。

別の意味で身の危険を感じる。

「おい、おぬし止まれ」

この声に口調は最近聞いたことがあり、すぐに振り返ると、その人物は思ったとおり近衛さんだった。

「何かようか？」

近衛さんとは転校してからちゃんとした面識は隼には一回もなかった。

しかし、近衛さんの睨んでおり、あきらかに敵意を感じた。

(まさか、シブを口説いていると、勘違いをしているのか?)

今朝方、シブと会話していた事を思い出していた。「ただ、世間話をしていただけだ」と声をだそうとしたが、

「おぬし

」

隼が言う前に近衛さんが話しかけた。

その声に背筋が凍り畏怖を感じ、なぜか手が震えだし鞆を落とす。近衛さんは隼の顔見て手に持っていた竹刀袋の紐をゆっくり解きながら言う。

「拙者の事を覚えているか?」

なぜか、竹刀袋を解く行為が、とても隼には嫌な予感がした。

隼の嫌な予感は結構な確立で今まで当たっていた。

ヒゲが起す事件に巻き込まれたり、島の火山が活動したときもそうだった。そして、今度は命に関わるような予感がする。

しかし、近衛さんについては、いくら考えても昨日が初めて会ったばかりで、隼には覚えがなかった。

「拙者は、おぬしの事を忘れた事はない。本当に忘れたことは〜」

視線は地面を向け、近衛さんの顔は親の敵を見るみたいに憎悪に歪んでいく、最後のほうは「ごにやごによ」と言葉になっていなく何を言っているのか分らなかった。

「おぬしの子供の毒のせいで死んだ。しかも、おぬしの呪いのせ

いで拙者は女として生まれてしまった。そしておぬしのせいで！」
地の底から出てきそうなためき声を出し、隼の顔さらに睨みつける。

（何を言っているんだ。何を・・・）と呆然と立ち尽くしているが、隼の背中は冷や汗が滝の様に噴出し、近衛さんの鬼のような形相を見ていると腰を抜かしそうになる。

近衛さんは竹刀袋を取り、その中身は竹刀ではなかった。

その中身は細長い柄が特徴な金鎚だ。

「その・・・金鎚を・・・どうする・・・つもりだ？」

震える声を出しながら隼は言った。はっきり言って怖かった。近衛さんの体はピクピクと震えている。

「おぬしのせいであのおなごとは結婚できない・・・。妻にもできない。お前のせいで・・・」

隼の話は聞いていないようだ。あの人とは誰だろうか？

「それで、おぬしは拙者のことは覚えているのか？」

百獣の王の前で武器も無く立ち尽くしたときはこんな感じだろうか？

自分の体なのか感覚がよく分からなく、すごく、重く感じる。

近衛さんが質問した答えには、隼にはその記憶も無く答えようが無かった。機嫌を悪くしないように慎重に答えないと、本当に金鎚で殴られそうな勢いだ。

「落ち着いてくれ、まず、その金鎚をしまっつけてくれないか」

震える声を抑え、しっかりと隼は答えた。

「覚えているのか。覚えていないのか。はっきりせえ〜い〜」

興奮したように大声で言う。

「どうやら、問答無用のようだ。」「やばい」と思い早口に隼は言った。

「す、すみません。覚えてないです」

つい隼は敬語で話してしまう。

その敬語で答えた瞬間に、近衛さんは鋭い眼光とともにニヤリと背筋が寒くなる笑顔を見せた。その笑顔は獲物を前にする獣に似ている。

金鎚を上段に振り上げながらゆっくりと隼に近づいてくる。

「じゃ、素直に死ね」

簡単に言つと、勢いよく振り下ろした。

その瞬間、ヤバイと思い後ろに下がろうとしたが、足が纏れて坂にころげ落っこちた。それがよかったのか上手く避けられた。

すぐに近衛さんの方に向くとこの世の物かと思うぐらいの映像を見た。

近衛さんが振り下ろした金鎚から電撃を起こし、その金鎚の振り下ろした周り直径10メートルぐらいに大きな穴ができ、鞆は跡形も無く灰になっている。

昔、図鑑で見た隕石が地球に降りそそいだ跡、クレータのようだ。

(まさか、あの金鎚で電撃を起こしたのか？ まさか、今の科学ではそんなの無理だ。しかも、近衛さんの体は電撃を少しでも浴びている筈なのに無事なのか？)

隼の思考はぐちゃぐちゃになり何を考えているのかが分からない。

非現実？ 現実？ 夢？

「おぬしが覚醒してないのなら、電撃を起こさなくても殺せると思う。しかし、もしもと言う事があるのでなあ。おぬしが作らせた物で殺せるとは……。おぬしにふさわしい死に方だな。はあ、はあ、はあ~~~~~」

目が笑っていない状態で近衛さんは笑い声を上げる。隼は何を話しているのかは頭に入らなかつた。人間を殺そうとしているのに、人間としてみていない目、人を物だと思いつながら見ている殺人者の目だ。

(逃げないと。逃げないと。逃げないと~~~~~
~~~~~)

本気で殺されると思った瞬間に、人間の生存本能なのか気が付い

ていたら隼は走り出していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7766x/>

---

神話の創り方

2011年10月26日02時02分発行